

長谷川郁貴の外国語科（第5学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

中央教育審議会では「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」と示されている。新学習指導要領では、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う」と述べられている。

そこで私は**目的に合った英語表現を用いて、相互に不足した情報を補い合う子ども**を目指す。これまでの授業では、子どもが簡単な語句や基本的な表現を暗記することにとどまっていた。このような子どもは、いつ、どのような場面でその英語表現を活用できるか判断ができないのである。これは、教師が言語活動の場面において子どもに学ぶことの意味付けを行わせないうまま英語表現を繰り返し練習させてきたことに原因がある。つまり、言語活動に必要感をもたせられていなかったのである。大切なのは子どもが「知りたい」「聞いてみたい」「伝えてみたい」「解決したい」と必要感をもって英語表現を学ぶことである。必要感を持ち英語表現を繰り返し使っていくことで、いつ、どのような場面でその英語表現が使えるかが判断できるようになり、目的に応じて英語を活用できるようになるのである。

そこで私は言語活動に必要感をもたせることで、目指す子どもの姿を具現する。言語活動に必要感をもたせるために、次のように指導の改善を行う。1つは、既存の知識とずれを生ませることである。私はずれを生ませるために日本と違いがある文化の資料を提示する。文化のずれを感じさせることで、その国のことやその国に住む人のことを「もっと知りたい」「もっと聞いてみたい」という思いをもたせるためだ。また、日本と違いがある文化を知ることは、外国語によるコミュニケーション能力の向上にも繋がる。2つは、子ども一人一人に課題解決に不足した情報を与え、友達とお互いの情報を交換すると問題解決ができるような場の設定をすることである。このような改善を図ることで目指す姿に迫っていく。

2 本研究で育成する資質・能力、そのために子どもが働かせる「見方・考え方」

「見方・考え方」		
日本と異なる文化に着目し、目的に応じて必要な表現を考えること		
①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
<ul style="list-style-type: none"> ○言語の働き、役割に関する知識 <ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し、言い換え等 ・感謝する、謝る等 ・賛成する、反対する等 ・依頼する、許可する等 ○外国語の音声、語彙・表現、文法の知識を実際のコミュニケーションにおいて運用する技能 	<ul style="list-style-type: none"> ○目的・場面・状況に応じて外国語を聞いたり読んだりして情報や考えを的確に理解するコミュニケーション能力 ○目的・場面・状況に応じて外国語を話したり書いたりして情報や考えを的確に表現するコミュニケーション能力 ○考えを形成、整理する力 	<ul style="list-style-type: none"> ○日本と異なる文化を尊重しようとする態度 ○自律的・主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度 ○他者を理解し、尊重してコミュニケーションを図ろうとする態度

3 主張する働き掛け

単元導入において子どもは、提示した活動を理解し、必要な言語材料に触れている(C0)。このような子どもに次の働き掛けをする。

働き掛け1

日本の文化と違いがある言語材料を複数提示し、疑問に思うことを問う。

既存の知識とのずれを感じさせ、違和感や問題意識をもたせるための働き掛けである。

日本の文化と違いがある言語材料を提示する。**日本と異なる文化に着目し、目的に応じて必要な表現を考える「見方・考え方」**を引き出すためである。子どもは提示された外国の文化と日本の文化を比べその違いに目を向ける。その後疑問に思うことを問う。子どもは既存の知識とのずれを感じ、違和感や問題意識をもつ。

働き掛け2

違和感や問題意識の原因を明らかにし、それを解決するためにどのような英語表現が必要かを問う。

違和感を解消する見通しをもたせるための働き掛けである。

違和感や問題意識をもった子どもに、なぜそう思うのかを問う。文化の違いに着目させるため

ある。子どもは原因が日本と外国の文化の違いにあることに気付く。ここで子どもに、違和感や問題意識を解決するのにどのような情報が必要かを問う。子どもは、**日本と異なる文化に着目し、目的に応じて必要な表現を考える「見方・考え方」**を働かせ、ある英語表現があれば情報が得られそうだと考える。この際どんな英語表現が必要かは、日本語で答えても英語で答えてもどちらでもよいこととする。子どもは知っている語彙が限られているため、既存の知識では解決できないことが想定されるからである。その後、子どもが必要だと考えた英語表現を担当やALTが伝える。そしてその英語表現があれば違和感が解消できそうか試させる。違和感を解決する見通しをもたせるためである。子どもは考えた表現を使えば課題が解決できそうだと気付く。

働き掛け3

誰に対してどの英語表現を使って関わろうとしているのかとその理由を記述させる。

学んだ英語表現を、目的に合わせて使い分けられるよう考えさせるための働き掛けである。学んだ英語表現を使い、誰に対してどの表現を使って関わろうとしているのかとその理由を記述させる。子どもは学んだ英語表現はいつ、どのような場面で使えるのかを考える(②思考力・判断力・表現力)。

働き掛け4

子ども1人1人に課題解決に不足した情報を与え、友達とお互いの情報を交換すると問題解決ができるような活動の場を設定する。

コミュニケーションを図る必要感をもたせ、英語表現を繰り返し使わせるための働き掛けである。限定された集団の中で、子ども1人1人に課題解決に不足した情報を与え、友達とお互いの情報を交換すると問題解決ができるような活動の場を設定する。子どもは他者とコミュニケーションを図る中で、学んだ英語を使って(①知識・技能)、他者の考えを理解しようとしながら(③態度)、友達の反応に応じてやりとりする(②思考力・判断力・表現力)。

このようにして、目的に合った英語表現を用いて、相互に不足した情報を補い合う子ども(Cn)になる。

働き掛け5

今回の活動で何が分かったのか、どうやったら分かったのかを振り返りシートに記述させる。

発揮した資質・能力を自覚させるための働き掛けである。

活動を終えた子どもに、何が分かったのか、どうやったら分かったのかを振り返りシートに記述させる。何が分かったのかを問うことで英語表現を使ったことで得られた情報を振り返らせ、どうやったら分かったかを問うことで、いつ、どのような場面で英語表現を使ったのか再度認識させるためである。子どもは、使った表現、目的に合った使い方、伝え合った内容などを振り返り、発揮した資質・能力を自覚する。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。
- ④ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、目的に合った英語表現を用いて、相互に不足した情報を補い合うことができたかを発言ややりとりの実際の子どもの姿から検証する。
- ② 働き掛け1・2を受けて、日本と異なる文化に着目し、目的に応じて必要な表現を考えるという「見方・考え方」を働かせたかどうかを発言、挙手、ワークシートの記述から検証する。
- ③ 働き掛け3・4を受けて、設定した資質・能力を発揮していたかを、発言ややりとり、ワークシートの記述から検証する。
- ④ 働き掛け5を受けて、発揮した資質・能力を自覚していたかどうかを振り返りシートの記述から検証する。

5 年間の授業計画

- | | | |
|--------------|------|------------------------------------|
| (1) 指定研究授業 | (6月) | 「What do you have on Monday?」(7時間) |
| (2) セルフ授業研修会 | (9月) | 「What time do you get up?」(8時間) |
| (3) 初等教育研究会 | (2月) | 「Who is your hero?」(8時間) |